



令和3年度

鹿児島県の教育

9月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会小学校長部会副部長

鹿児島市立大龍小学校長
西園 香緒利

地球をきれいにしてるんです

以前勤めた学校での出来事である。ほぼ毎日徒歩で登校してくる彼は、道すがら通学路にころがっていたと思われる空き缶やお菓子の袋を手にして正門をくぐる。感心だなあと

思っ、
「こんなにゴミを捨てる人がいるなんて残念だよねえ。それにしてもえらいね。」
と、声をかけると、彼は一言、

「ぼくは地球をきれいにしてるんです。」
と、すがすがしい笑顔で（当たり前のことだと言わんばかりに）答えた。正直、どうしてそう思えるのかと感心するやら驚くやら。しかし、なるほどそうか。私たちはどこにいても地球にいることには変わりはないわけで、そう考えると、自宅の周りであっても、初めて訪れる土地であっても、すべて地球を大切にすることに繋がると妙に納得がいった。

このことがあってから、校外外に限らず、地域の清掃活動やごみ拾いに精を出す子どもたちに対し、私はこう声をかけることにしている。

「地球をきれいにしてくれて、ありがとう。」
本校は、平成三十年度に青少年赤十字加盟

校に登録し、四年目を迎えている。

六月下旬、青少年赤十字研修会に参加する機会を得た。青少年赤十字の実践目標には、「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」がある。今であれば、コロナ禍における自他の生命と健康を守ることに、誰かの役に立ちたいというボランティア活動、そして、周りの多様な存在を思いやり、交流を深める活動など、子どもたちにとって、何より意義のある活動である。もちろん、

これまでも意識づけて取り組ませてきた。しかし、態度目標である「気づき 考え 実行する」子どもを育ててきただろうか。自己に対して肯定的な評価を抱く自尊感情や周りに目を向けるきっかけづくりを全職員で意識してきただろうかと反省した。「気づき 考え 実行する」は、かた反省した。「気づき 考え 実行する」は、子どもだけではなく、我々を含む周りの大人の意識目標でもあると痛感した研修会であった。

冒頭で述べた「地球をきれいにしてるんです」は、究極の目標である。彼のゴミを拾う活動を支えている心の中には、「誰かが喜んでくれる。」
「気持ちが良い。」
「小さな活動だけど、何よりこれは、地球をきれいにしていることなんだ。」
と思える信念があり、「実行する」ことで、自己有用感がきつと充滿しているにちがいない。

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	12
随想	2	読書案内	14
提言	3	趣味・文芸	17
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	18
子どもが輝く教育	7	総務部だより	19
心に残るひとこと	9	一般財団法人校長会館だより	20
ある日の校長講話	11	編集後記	20

令和3(2021)年9月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有)アクト印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844



世界自然遺産の島「徳之島」

環境省徳之島管理官事務所
国立公園管理官 福井俊介

ワイドーワイドー喜びの掛け声が会場に響き渡りました。二〇二一年七月二十六日に徳之島を含む「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」が世界自然遺産に登録されました。屋久島も含め、鹿児島県は日本で唯一、二つの世界自然遺産を持つ都道府県となったのです。

徳之島で自然環境の保全に携わっている私は現地で行われていた視聴会会場で登録の瞬間を迎えました。世界自然遺産への登録の時は一瞬でしたが、登録に至る道のりは非常に長いものでした。この奄美・沖縄の地域が世界自然遺産の候補地となったのは実は二〇〇三年のことで、十八年越しに登録が果たされたのです。実は私が生まれた一九九三年度に日本初の世界自然遺産である屋久島が登録されており、日本では最後の世界自然遺産とも言われている本遺産の登録にこの自分が関わることができたのは非常に感慨深いものです。

徳之島と聞くとと広大な農地と海のイメージが強い方が多いかもしれませんが、本遺産で評価されたのは森林地域の生物多様性です。生物多様性という言葉自体まだまだ聞きなれない方が多いと思いますが、ここにしかない生物や絶

滅のおそれのある生物を含め様々な生物が生育していることを指します。奄美大島と徳之島にしか生息していないアマミノクロウサギをはじめ、徳之島にしか生息していないトクノシマトゲネズミやオビトカゲモドキなどまさに生命あふれる島が徳之島なのです。これらの生物は人間が住む遙か昔から、まだ徳之島が他の島から別れる前から生息・生育しています。徳之島は他の世界自然遺産と比べても人と自然の距離が非常に近い世界遺産と言われています。徳之島は人口約二万人の有人島ですが、世界の宝となるほどの類まれなるこの生物多様性をいまだに有していることに私は最初驚きしかありませんでした。人と自然の距離が近いからこそロードキル（野生生物の交通事故死）や外来種問題などの課題もありますが、一方でこれまで徳之島に住む人々がこの島の自然とうまく付き合ってきたことでこの自然が残り続けていることも忘れてはいけません。まさにこの島の自然は文化や慣習によって守られ、また、この島の文化や慣習は自然によって育まれてきたのだと考えています。

私は世界自然遺産になるほどの、この島の自

略	歴
二〇一八年	環境省自然環境計画課
二〇一九年	環境省沖縄奄美自然環境事務所
二〇二〇年	環境省徳之島管理官事務所

然の価値を伝えるために、島の小中高校や他各所で出前授業や講演会を行わせていただいております。「アマミノクロウサギを見たことはありますか?」「アマミノクロウサギの交通事故の問題を知っていますか?」と質問すると、最近の子供たちの方が大人よりも手が挙がるように思います。また、子供たちが自発的に美化清掃運動をする動きも昔より活発化していると聞きます。「環境学習」と最近では言われますが、この島における環境学習は様々な意味合いを持つと考えています。自然を感じ感性を磨くこと（感受性の向上）はもちろん、自分の住む地域に対して誇りを持つこと（自信の創出）、島のことを考え自分にできることを実践すること（課題解決力の向上）、そして、先ほどの話に挙げたような人と自然が共生できる道を考えること（文化の継承・SDGsの理解）など多くの学びが期待できます。自然を壊してしまいうも人であれば、自然を守ることが出来るのも人です。特に人と自然が共生できる道を考えるのは、自然環境の破壊が人間社会や経済に大きな打撃を与えているこの時代において、何を行うにしても基盤となる大変重要な考えだと思えます。それを学ぶことが出来る素晴らしいフィールドが徳之島なのではないかと期待しております。この世界自然遺産登録が子供たちの学びのきっかけになり、将来にわたって世界の宝を守る礎ができることを切に願っております。



質の高い授業を目指して

帖佐小(始) 牧野田 弘 一

一 三十代での学び

二十年前、県外の学校で勤務する機会をいただいた。そこには十を超える府県から集まった教員が、互いの知見をぶつかり合わせる文化があった。わずか三年の勤務ではあったが、濃密な時間は私に多くの学びを残してくれた。

一年目に同学年を組んだのは岡山から来た、私と同じ新任。どちらもプライドだけは高いのだが、新任授業は惨憺たるものだった。そんな心許ない二人を学年主任として束ねていただいたのが、当時十四年目のK先生である。主任の語り口は切れ味鋭く、洗練されたものであった。赴任から二か月が過ぎようとしていた頃、慣れぬ土地での授業に悩み続けていた私を見かねて、声をかけてきた。「俺の授業を見てみるか。金はとらんから」。研究公開の日には彼の授業をめぐって、県内外から毎年百人を超える人が集まってくる。悔しさ半分、情けなさ半分の私は、肩を落として教室の後方から授業を見ることになった。指導案があるでもなく、教科書とチョークだけで展開された、「漢字の広場」のような時間であった。しかし、四十五分間の授業は瞬く間に終わった。まるでドラマを見ている

ような感覚であった。そこには、子どもと教師の意味のある対話が溢れ、確かな学びが残されていた。教室にいる誰もが学ぶことを楽しんでいった。中教審答申にアクティブ・ラーニングが登場する十年以上前の話である。その後、自分が授業をする時も、授業を参観する時も、あの日のあの授業が規準となっていた。

その学校では、研究授業、論文査読、読書会と様々な研修が年間を通して行われていた。その中で、最も苦しく最も得るものが大きかった研修がある。それは、研究公開当日の授業ビデオを五分にまとめ、成果と課題を明らかにするというものであった。編集するからには、四十五分間の授業を幾度となく繰り返し返して見ることになる。そこには、見逃していた子どもたちの思いや願いが埋まっていた。あの子どもたちの発言にきちんと意味付け・価値付けするべきだった、この子どもが大きくなずいた姿を見逃していた。自分の授業を客観的に見ることで、多くの気付きを得ることができた。

二 質の高い授業を目指して

「質の高い授業をしたい。そのためには授業改善を図らなければ。」という思いは多く

の教員がもち、日々努力しているであろうと信じている。その思いを成就するために二つの取組を提言したい。

(一) 共有財産の構築

一つはモデルとなる授業を見ることである。校内研修、研究公開等で高次の授業に巡り会うことがあるが、そのチャンスは限られている。そこで、これはという質の高い授業の映像がアーカイブ化され、教員が視聴できるような共有財産を構築することができないだろうか。肖像権や個人情報保護等の制約はあるものの、教員自身が見て学ぶ環境を整えば、多くの示唆を得ることができる。

(二) 客観的な授業分析

もう一つは自分の授業を客観的に視聴し、自己評価・自己分析することである。できれば、そこから見いだした成果や課題を交流することで、更に深まりを得られる。これは、意識さえあれば実現することはそう難しくはない。ただし、自分の授業を見ることがなかなか踏み出せない一歩ではある。

三 ゴールを見据えて

質の高い授業の先にあるものは何だろう。学力向上は言うまでもないが、子どもたちが人生をより豊かにしていくためにどうすべきか主体的に考え出すことができる力、即ち「生きる力」の獲得ではなからうか。先行きが見えにくい今こそ、子どもたちに真の学力を身に付けられる、責任ある職員集団が育つ学校経営を目指したい。



「危機」を乗り越える力

中平小(熊) 城戸 敏明

一年延期された東京2020オリンピック。パラリンピックでは、母国の期待を一身に背負い躍動する姿、勝者と敗者が健闘をたたえ合う姿、関係者への感謝を言葉にする姿など、数多くの名場面を目の当たりにした。競技時間は、選手やチームが大会に向けて積み重ねてきた時間に比べれば一瞬である。そこまでの道のりには、けがや病氣、練習環境の変化などの試練、計り知れないほどの不安や葛藤があったにちがいない。それらを克服して勝負に臨む選手やチームの姿を通して、学校が危機を乗り越えるために何が必要かを考えた。

今回の大会は、世界中が新型コロナウイルス感染症の対応に苦悩する中、開催の賛否も論じられた。選手生命や人生を賭け、一心に競技力を高める努力を重ねてきた選手にとって、危機以外の何ものでもない。しかし、一年延期されたことで、「選手力・競技力を高める時間ができた」と発想を転換し、精進を重ねた選手も多いと聞く。この発想の転換、対応の柔軟性こそが、学校における様々な危機を乗り越える大きな力になると考える。

これまでに勤務した社会教育施設で、様々な

窓口対応を経験してきた。全く面識のない方からの不平不満や批判的な言い方に「なんと理不尽なことだろう。」と腹立たしさを感じたこともあった。しかし、冷静な対応に努めようとすると、意外にも「変える・見直す」きっかけになるありがたい言葉がたくさんあることに気付いた。

学校においても、地域の方や保護者からいろいろな連絡をいただく。なかには、学校の対応や担任の指導などに疑問を投げかける保護者もいる。しかし、そこには学校を「変える・見直す」ヒントがある。むしろ、一番怖いのは、地域や保護者が学校に対して無関心になり、声を発しなくなることである。何もないことを喜ぶよりも、一つ一つの言葉をありがたく受け止め、適切に対応していこうとする発想の転換や柔軟性が必要である。

数年前、ある研究大会の講演で聴いた「準備はネガティブに、試合はポジティブに」「明るい人(集団)には福が来る」という言葉を思い出した。今回のオリンピックで躍進を遂げた日本柔道界を支えた男子代表監督の井上康生氏の言葉である。

学校の危機において、学校が負の方向へ作用しようとする局面も想定される。その時々で状況が異なり、想定範囲を超え、対応に苦慮することもありうる。しかし、そのような時こそ、事を冷静に受け止め、明るくポジティブに振る舞うチームの柱と、「慌てず・焦らず・諦めず」にその状況を克服できる強固なチーム力が必要である。

チームの柱は校長である。チームの不安や動揺を軽減させ、進むべき方向性を明確に示していく。また、職員がそれぞれの持ち場で力を発揮できるような確に指示したり、地域や保護者が強力な応援となるよう理解や協力を求めたりする。このような柱としてのその時々々の状況に応じた立ち振る舞いは重要である。

本校では、「一人ではない 一人にしない」を職員の合い言葉にし、一人一人の力を合わせる、協力し合うことを大切にしている。危機的状況を克服できるチームの『和』づくりに必要なことである。あらゆる危機を克服したチームは、さらに強固なチームへと育っていくであろう。

校長の最大の仕事は「危機管理」であるとかつての上司に教わった。現状を「よし」とせず、高みを目指してよりよく改善を図っていくという意味においては、学校が抱えるすべての課題が危機であるということであった。学校における危機を乗り越えるために、小事を侮らず、ネガティブに手立てを講じ、厳しい局面に至っても「明るく」「ポジティブ」に対処していくことが肝要であろう。その先に「福」が来ることを信じて。



子どもにとっての

最大の教育環境は教師自身である

市来小(旦) 児玉 学

一 はじめに

本校は、いちき串木野市の南部に位置し、白砂青松の吹上浜に面した自然環境豊かな学校である。児童は明るく素直で、高学年を中心に朝の委員会活動やボランティア活動、学級単位での縄跳びやレクリエーション活動に積極的に取り組んでいる。学級数は十五学級(特別支援学級四学級)、児童数二百九十七人の中規模校である。校区には、JR鹿児島本線、国道三号線や二百七十号線、九州西回り自動車道の市来インターチェンジがあるなど、交通の利便性は高いが、児童の登下校時の交通安全対策が大きな課題である。

かつて、本校区に旧鹿児島第二師範学校が設立され、その附属小学校として位置づけられた時代があり、住民の教育に対する関心は高く、来年初立百五十周年の佳節を迎える。

二 学校経営の方針

現在の子どもたちが私たちの世代になった未来の社会は、どのようになっているのだろうか。国際情勢の変化、気候変動、科学技術の劇的な進歩、特に人工知能やロボットなどの技術の発達により、今ある職業の半分くら

いがなくなると言われるほど、予測不可能な社会になると言われている。そうした中でも、子どもたちには自分の力を大いに発揮し、幸福に満ちた人生を切り拓いてほしいと思う。そうした思いから、本年度は、これまでの経緯も踏まえながらも、「挑戦」とへこたれない「たくましさ」というキーワードを学校経営ビジョンに加え、「夢と志を持つ市来っ子の育成」から「夢に向かって挑戦する心身ともにたくましい市来っ子の育成」と見直しを図った。さらに、児童同士・教員一体となつて切磋琢磨できるよう、合いことは「やればできる」を設定し、学校経営を推進している。

三 地域の特性を生かした教育活動

(一) 幼小中一貫教育

子どもたちが健やかに成長することは、全ての人の願いであるが、そのためにはその教育に携わる者の連携が必要不可欠である。市来地域には、一中学校、二小学校、一公立幼稚園があり、連携を取りやすい環境が整っており、「年三回全体研修会・教科部会」「小中相互乗り入れ授業」「小学校交流学習」「いも作り(幼小連携)」「幼

小職員交流」などの取組を行っている。これらの取組の成果はもちろんのこと、取組を通して職員が交流を図ることで、より情報交換をしやすい雰囲気醸成されている。

(二) 学校支援ボランティア

市来地域は、子どもたちのために何かできないかという意識が高く、学校への協力を惜しまない地域である。支援例を挙げると「年度当初の一年生下校見守り」「PTA時の託児」「田植え・稲刈り・餅つき」「ミシン学習」「昔遊び」など労をいとわず、喜々として御協力をいただいている。こうした御厚意に報いるためにも、さらに子どもたちの笑顔を引き出し、学校から家庭や地域へ元気の波動をおこしていきたい。

四 おわりに

学力向上、体力の二極化、いじめ、不登校、ネット依存、家庭の教育力の低下など、学校には多くの課題が山積している。また、外国語活動、GIGAスクール構想への対応など為すべきことも多い。そうした中、さらに未曾有の災禍であるコロナへの対応にも教職員一丸となって眼前の課題に取り組んでいる。そうした教職員の懸命な姿こそが、子どもとの挑戦やたくましさを育むことにつながるものと確信する。その教職員の先頭に立つ校長として、まず自分自身が自己を変革し、教職員の心に火をつけ、励ましを送り続けられるよう努めていきたい。



「遠隔合同授業」と「ふるさと教育」

特色ある学校を目指して

母間小(大) 青 崎 幸 一

一 はじめに

本校は、徳之島の東海岸に面したところであり、前面には太平洋の大海原が開け、与路島・請島を望み、後方には母間御岳と井ノ川岳がそびえている。本年度の児童数は四十三人、一・二年単式学級、三年以上複式学級となっており、特別支援学級を加えた五学級の極小規模校である。

母間小校区には、地域の方々が大切に受け継いでいる二つの言葉がある。「母間正直」と「母間魂」である。「母間正直」は、思いやりや勇気を持つことの大切さ、校訓「母間魂」は、「できないということを言わぬ、最後まで本気でやり通す。」という教えである。これらの教えを継承しつつ、一人一人の個性を大切にしながら教育を推進したいという想いを合言葉「キラリかがやけ」に込め、学校経営に臨んでいる。

二 学校経営の柱

本校の学校経営の基盤には人権教育があり、その基盤の上に学校経営の二つの柱がある。それが、「遠隔合同授業」と「ふるさと教育」である。

三 遠隔合同授業

本校では、近隣三校とテレビ会議システムを結び、遠隔合同授業を研究・実践している。平成二十九年には文科省実証事業校として、令和二年度には大島地区「ICT利活用」研究協力校として公開を行った。特に、複式を解消し直接指導の時間を増やす複式双方向「徳之島型モデル」が高い評価を得ている。「徳之島型モデル」とは、複式学級同士の二校を繋いで、各学年を一つのバーチャルクラスとして、それぞれの担任が指導を行う遠隔合同授業のことである。算数科や国語科では、児童の考えを交流させる場面で繋ぎ、思考力の育成につなげている。また、多様な考えに触れたり、相手意識を持って活動したりすることで表現力の育成も図られている。さらに遠隔合同授業充実のため、学校間でガイドの手引き・校時表・学習規律等の統一や定期的な合同研修会の実施をしている。

四 ふるさと教育

「ふるさと教育」とは、本校区の地域素材や人材を活用した特色ある教育活動である。まず、島口劇「母間騒動」がある。江戸時代に母間集落の人々が命をかけて薩摩まで直訴に行った出来事をもとにした劇である。児童は、使い慣れない島口を練習し郷土の先人の偉業をたたえ、誇りを持って演じている。次に、「母間少年少女消防クラブ」である。

島内唯一の児童による消防団体であり、今年で結成二十六年目を迎える。地域のボランテニアや海岸清掃、年末の夜間警戒などボランテニア精神を育む独自の活動をしている。過去には全国表彰を受けている団体である。

最後に「池間棒踊り」と「しゃんかね節踊り」の郷土芸能があり、児童が母間の伝統を力強く引き継ぐ活動を行っている。

これらの活動を通して、学校は地域と連携し、児童は地域を誇りに思う心身の育成が図られている。

五 おわりに

GIGAスクール構想の推進により、児童一人一台の整備が図られている。このような状況のなかで、本校の遠隔合同授業を通じたICT機器の利活用は益々大事になってくると考える。今後も、遠隔合同授業の改善を進めつつ、タブレットの活用やオンライン授業の研究にも取り組むたい。さらに、島の伝統文化の継承という役割も大切にしながら地域に根ざした学校運営を進めていきたい。



地域とともにある教育活動の推進

一人一人が輝くために

清水小(市) 小園 俊介

一 はじめに

本校は、旧鹿兒島市の北部である上町地区に位置し、近世の内城の城下町として古くから発達した地域にある。校区内には、世界文化遺産の旧集成館一群の仙巖園や異人館など歴史的に価値の高い建物や遺構が多く残されている。郷中教育の教えである「負けるなうそを言うな 弱い者をいじめるな」を清水魂として受け継ぎ、「かしこく」「やさしく」「たくましく」を校訓に掲げ、その具現化を目指して、家庭や地域と連携しながら教育活動の充実に向けて取り組んでいる(本年度の児童数五百二十人)。

二 校内で取り組む活動

(一) あいさつ運動

伝統的な活動の一つとして受け継ぎ、児童会を中心にして学校全体で取り組んでいる。本年度は児童会が「元気なあいさつでえがおあふれる 清水っ子」をスローガンに掲げ、生活委員会が正門で立哨し、大きな声であいさつ運動を行っている。また、保護者や校区内の民生委員会などの団体も定期的に正門や交差点等でのあいさつ運動

に協力してくださっている。

(二) ボランティア活動

本校六年生の伝統的な取組の一つにボランティア活動がある。業前活動の一環で、学校内外の清掃に取り組んでいる。学校周辺の歩道の落ち葉や降灰を集めたり、校舎玄関付近を掃いたり、職員室前の廊下を拭いたりして汗を流している。また、歳末助け合い運動の街頭募金活動などにも積極的に参加し、大きな声で募金を呼びかけている。

三 地域とともに取り組む活動

(一) 錦江湾横断遠泳

本校の特色あるイベントとして「錦江湾横断遠泳」がある。本年度は七月三十一日(土)に二年ぶり(昨年度コロナのため中止)に行われ、六十一人の子どもたちが完泳するこ



磯を目指す子どもたち

とができた。それまでには、五月初旬から始まるプールでの練習や厳しい泳力検定、海での練習や検定に合格しなければならぬ。それを支えているのが「清水小学校錦江湾横断遠泳実行委員会」である。「水泳同好会」(会長・副会長・コーチ長・保護者会役員)、後援会(会長・副会長・事務局長・コーチ長)、同窓会、あいご会、PTA、医師団、学校等々の関係する団体で組織されており、まさに地域と一体となった教育活動である。

(二) 学校支援ボランティア活動

学校の要望に応じて、清水本部コーディネーターの方が、保護者や地域の方々の要望を調整し、子どもたちの教育活動への支援や応援をいただいている。教科学習や行事等での学習支援(援助や引率補助・安全管理等)、朝の読み聞かせ、環境整備等々である。十件(七月現在)の活動に、延べ二百四十八人の方々の協力をいただき、教育効果を上げている。

四 おわりに

地域の方々の郷土に対する思いは深く、学校への協力も惜しまない。地域との繋がりが強いと感じている。この地域力を生かしながら、本校の課題解決に向けて努力するとともに、学校と家庭と地域が連携・協力し、子ども一人一人が輝ける、地域とともにある教育活動を推進していきたい。



極小規模校の特色を生かした教育活動

三島竹島学園(郡) 濱田和彦

一 はじめに

本校にとって、令和三年五月十二日(水)は子供たちや私たちにとって忘れられない、一生の思い出に残る日になった。

天皇皇后両陛下が「こどもの日にちなみ」のオンラインで本校を御訪問くださった日だ。御訪問のことを伝えると一様に驚いていた子供たちのことを今でも思い出す。また、九年生の生徒が御訪問の前日、「竹島だからこそ御訪問やジャンベを体験できたのですよね。」としみじみ話をする姿が印象的だった。十二日当日、両陛下は緊張している子供たちに優しく語りかけてくださり熱心にお話を聞きくださった。御訪問後の子供たちは何とも言えないよい表情を見せていた。子供たちや私たちにとって一生の思い出に残る日になった。

二 取組の実際

(一) 遠隔授業

本校で取り組んでいる遠隔授業は次のとおりである。

ア A L T とつないだ遠隔授業

鹿児島市の役場に常駐するA L T の来島は、月一回程度なので、毎時間十分程度A L T とつないだ英会話や授業を行っている。(前期課程三・六年)(後期課程七・九年)

イ 専門家とつないだ遠隔授業

各界の専門の講師の指導による授業を行っている。

ウ 遠隔合同授業

他校の児童生徒と学習することを通して、お互いの考えを発表し合い、考えを深めたり広げたり、違う考えを受け入れたりしながら、課題解決を図っている。三島村の特性を最大限生かした教育活動

ア ジャンベ活動

三島村全体で取り組んでいるジャンベ活動だが、夏の祭典(県の音楽コンクール)を目指して頑張り、今年も金賞をいただいた。

イ ハマギプロジェクト(教科・横断的)

竹島を多くの人に知ってもらうために、島に自生するハマギ(ぼたんぼうふう)を活用したプロジェクトを立ち上げ、教科横断的授業(ジオ・国語・家庭・技術・美術など)として取り組んでいる。企画

三 おわりに

四月に赴任した私は本校で行われている教育活動を肌で感じ驚いた。

コロナ禍で遠隔教育の必要性が一樣に叫ばれる中、本校ではすでに、オンラインやタブレットを使った授業が日常的に行われていた。

極小規模の本校にとって主体的・対話的で深い学びを実現することはなかなか難しい。人数が少ないことを逆手にとり、遠隔授業等を含めた遠隔教育を推進していくことに活路を見つけ、実践を重ねたことで飛躍的に遠隔教育が進み学びの深い授業を展開することにつながった。

また、ジオ科に代表されるように三島村の特性を十分生かした教育課程が編成され特色ある教育活動が展開されていた。これらの活動は子供たちの心を豊かにし、かけがえのないふるさと竹島を愛し、誇りに思う心情や態度の育成につながっていくと確信している。



出会いは宝

牧之原小(始) 馬場 修身

指宿に住んでいた頃、当時小学生だった二人の我が子が、指宿市の「菜の花マラソン」の県外参加者に年賀状を書く」という企画に参加した。県外からの参加者、六十歳以上の方々に対して、参加した子ども一人で二、三名を抽出して年賀状を送るといふもの(ちなみに、今は個人情報保護の観点から行っていない)。

年賀状を送った相手がどんな人か分からないままのマラソン当日。応援するため、子どもたちは教えてもらったゼッケン番号を段ボールにマジックで書き、頭上に掲げながら待った。しかし、毎年一万人以上が熱走するマラソン、どれだけ長時間待たばいいのかわからない不安もあった。当時、妻が「六十歳過ぎて、わざわざ県外から参加する。十分な練習をしている人だ。遅いわけがない。」と断言したことも覚えている。忘れもしない池田湖付近、結果、すべてのラ

ンナーと面会できたのだ。年賀状に「池田湖あたりで応援しています。」と添え書きしていたと思うが、池田湖あたりは十キロ過ぎ、まだまだ大きな集団。よくわかったものだ。妻の準備した飲み物を飲んで、談笑される方。「馬場くん(子どもに)、ありがとう。」と走りながら笑顔で手をふる人。急に目の前に現れ、「○○です。応援ありがとう。」と言ってウエストポーチからお年玉を渡し、五秒ぐらいで、颯爽と集団にもどる人。この初めて会う人たちとの不思議な交流に、家族で喜んだ。

その後も、野菜や銘菓が送ってくるなど、数名の方とは、今も交流が続く。そして、霧島市に赴任した三年前の春、その中の一人のAさんと宮崎県で再会する機会をいただいた。八十歳を過ぎてても元気に畑仕事を頑張っているとAさん。食事をしながらこれまでの交流に感謝の言葉を述べると、「出会いは宝ですから」と即答。心に響いたのは言うまでもない。

教員生活の面白さの一つに、それぞれの赴任先での出会いはある。過去の出会いを振り返り、改めて感謝する機会を与えてくれた言葉であった。

最高の教師は子供の心に火をつける

種子島中(熊) 柏 木 昇

「平凡な教師は言ってみる。よい教師は

説明する。優秀な教師はやってみせる。しかし、最高の教師は子供の心に火をつける」

教育者 ウィリアム・ウォード
宇宙航空研究開発機構(JAXA)の名誉教授である川泰宣先生が、宇宙に関する講義の中で、「燃料(夢や好奇心)は子供の心の中にある。子供の心に火をつけることが未来を拓いていくことにつながる。」と、教師観・教育観を示すときにたびたび引用されており、このような子供の心に火をつけられる授業ができる教師になりたいと強く思ってきた。

二〇一九年、NBA(アメリカプロバスケットリーグ)のドラフト会議で一位指名を受け、ワシントン・ウィザーズに入団した八村塁選手は、インタビューの中で「まずは中学のコーチに感謝したい。彼は『NBAへ行け。』と言ってきたので、それを信じてやってきました。」と話した。小学校まで野球や陸上をやっており、中学入学後、なかなか部活動が決まらなかった。少年を、コーチはバスケットボール部へ誘い、「将来はNBAを目指せ。」と常に言い続け、熱意を持って接してきた。コーチとの出会いとその言葉掛けが、塁選手の心に火をつけたのである。

オリンピックで活躍する八村塁選手を観て、一人一人の子供の心に寄り添いながら、気になることは問い掛け、言いにくいこともしっかりと指摘し、良いところは認めて伸ばしていく、教育的愛情を持ちながら接していくことの大切さを改めて強く感じた。新型コロナウイルスの影響で、学校行事や部活動等に制限がある今だ

からこそ、真剣に向き合った生徒、やり切った生徒に対して、大いに称賛し、達成感と満足感を自己肯定感に変えられるよう、言葉掛けをしていきたい。いつまでも生徒の意欲に火をつけられる教師でありたい。その思いを強くした。

「子供の姿で勝負する」

上小原中(隅) 福元 耕二

本校に赴任した当初、生徒の「挨拶」が思わしくないと感じた。そこで、ありきたりではあるが、まずは毎朝正門付近を庭ぼうきで掃きながら、生徒に挨拶をすることにした。相手が生徒でも先手挨拶。こちらが挨拶してもまともに返せないような生徒にも、めげずに挨拶。若い頃は「挨拶は目下の者が先にすべきもの」などという考えに固執していた時もあった。そんな自分自身を思い出すと、心の中で一人苦笑してしまうことがある。

今年度に入って間もないある朝、何人かの生徒の挨拶の仕方が前日までと明らかに変わった変化を見せたのは一年生ばかりである。確かに前日、生徒会が行う「新入生歓迎会」で生徒会役員が「挨拶の仕方」を取り上げてはいた。しかし、一部とは言えあまりの生徒の変貌ぶりである。聞くと、そのクラスは歓迎会終了後、教室に戻ってからも担任の指導で挨拶の仕方を何

度も練習したと言う。

一人合点が行った私は、これほど生徒の行動を変えるような指導を行ったこの教員に感心し、感謝の念すら覚えた。同時に、指導を受けたことを素直に実行している生徒たちの姿にも胸が熱くなった。私など、挨拶運動や校長講話を続けながら職員へも指導を促し続けたつもりではあったが、一年たってもさほど成果は感じられなかった。ところが、今年度転入したばかりのこの教員(生徒指導主任)は、わずか一回の指導で、自分のクラスの生徒の「姿」を劇的に変化させたのである。

「子供の姿で勝負する」——私がとある町教委に勤務していた際、当時の教育長が事あるごとに口にしていた言葉である。平易な言葉のようでも、私には厳しく響く。

日頃私たちは、子供に対し「どういう指導をしたか」が問われる。重要なことである。一方、その指導により「子供はどう変わったのか」ということにも目を向きたい。指導が「子供の姿」となって現れて、初めて私たちは「指導した」と言えるのかもしれない。

不断の努力

桜丘養護 有馬 一郎

オリピックの開催を目前にした終業式で、

「オリピックでメダルを獲得した選手に贈るおめでとうを表す英語の言葉があります。オリピックを観てその言葉を見つけてください。」と話した。多くの努力をして勝ち得た人を讃える言葉のことである。

小学校を卒業する時の担任からの言葉が「不断の努力」である。いただいた色紙の言葉の意味も深く考えず部屋の壁に画鋲で留めていた。中学校の家庭訪問で部屋をのぞいた担任から、

「良い言葉だ。とても大切なことだ。」と言われた言葉でもある。二人の教師から面と向かって言われると、私自身に最適な言葉なのかと忘れられないものになった。

特別支援学校で学ぶ多くの児童生徒が苦手とすることに周囲とのコミュニケーションがある。素直で頑張り屋の卒業生が中途退職した理由が、自分の限界以上の作業を求められても断れなかったり、相談できなかつたりすることだった。会社側からすると期待の大きさだったのだが。現在は、職場に良き理解者が配置され、職場や卒業生をサポートするシステムが進んできているようである。

本校でも立志式を行っている。生徒へは「不断の努力」を贈る言葉としている。一方、保護者には、頑張り頑張りだけでなく、一休みできるような見守りをお願いしている。

多くのオリピックメダリストが、不断の努力の成果を口にする姿に感動を覚えつつ、ふつと力を抜くことの大切さを教えることも必要である。

ある日の校長講話



本にぱつと手を伸ばし
本の世界に飛び込もう！

小山田小(市) 有 村 暢 高

先週の避難訓練では、「自分の命を守り抜く」大切な学びがありましたね。「命を守る」つながりで、この本お薦め。他人の命を守る仕事のうち用心棒が主人公の物語、「守り人シリーズ」第一作『精霊の守り人』。主人公は、女用心棒バルサ。武器は、短い槍。人の世と、精霊や神のような存在がいる異世界とが行き交う中で、バルサは、ある国の皇子チャグムの命を守る任務を請け負うんだね。チャグムと共に、追手から逃げ、命懸けで戦うバルサ。果たして、バルサはチャグムの命を守り抜けるのか!? 作者の上橋菜穂子さんには、「守り人シリーズ」のほかに、「獣の奏者シリーズ」もあります。ちなみに、上橋菜穂子さんは、「国際アンデルセン賞」と

いう、児童文学でのノーベル賞と呼ばれる賞を受賞しています。世界に認められている作家さんなんですよ。四年生以上や先生方、みなさんのお父さん、お母さんにもお薦めです。

一・二年生の皆さんにお薦めの本、「ぞくぞく村のおぼけシリーズ」。ぞくぞく村に住んでいる登場人物がおもしろい。寒がりの透明人間、入れ歯の吸血鬼ドラキュラ、箒に乗れない魔女、時々バタになってしまう狼男。シリーズ第一作は『ぞくぞく村のミイラのラムさん』。ぜひ、読んでみて。

三・四年生のみなさんにお薦めの本、「ふしぎ駄菓子屋 銭天堂シリーズ」。幸運な人だけがたどり着ける不思議な駄菓子屋「銭天堂」。店主の紅子が勧める本日の駄菓子は、どれもその人の悩みにぴったりのもの。でも、食べ方や使い方間違えると、たいへんなことに…。

幸運を呼ぶか、不幸を招くかは、その人次第。確か、アニメになってテレビで放映されているのかな。観たことある人。たくさんいるね。人気なんだね。この原作の本と、アニメとを比べると、違いや共通点、登場人物の声の感じ、音楽、効果音など、いろいろな発見があって、おもしろいと思いますよ。ぜひ、読んでみて。

今週の水曜日から、校内読書旬間が始まりますね。図書委員会の五・六年生が、ワクワクする活動をいっぱい準備しているようですよ。いろんな本に、ぱつと手を伸ばして、本の世界に飛び込んでいこうね。

最善を尽くす

市来中学校(日) 五反田 晴 夫

メジャーリーグでの大谷翔平選手の活躍は皆さんも知っていることと思います。二刀流である豪快なホームランと三振を奪う剛速球を見るたびにたくさんの勇氣と感動をもらっています。また、謙虚でさわやかな人柄に好感を持たれている皆さんも多いと思います。この活躍を支えているのは、大谷選手のゆるぎない信念とたゆまぬ努力のたまものだと思います。敬意を表したいと思います。

その大谷選手が日本人メジャーリーガーの間ホームラン記録(三十二本)を先日更新しましたが、それまでの記録は松井秀喜選手が持っていました。松井選手は日米通算五百七本のホームランを放ち、高校三年の夏の甲子園では、五打席連続敬遠という歴史に残る記録も打ち立てた偉大な野球選手の一人です。

松井選手が引退後にあるインタビューを受けた時、自分の野球人生を振り返って「私は優れた才能は持ち合わせていませんでしたが、人よりも努力できる才能を持っていました。」と答えていました。松井選手は謙遜していますが、持ち合わせた才能の上に、どんなきつい練習にも耐え、人一倍の努力があったからこそ一流の選手になれたのだと思います。

どんなすばらしい才能を持ち合わせていても、常に磨き続けなければ開花しないということを松井選手は教えてくれます。

皆さん一人一人も素晴らしい才能を持ち合わせています。そして、時間は等しく与えられています。だからこそ、興味がある時もない時も、楽しい時もきつい時も断固として最善を尽くすことで、その一瞬が、あるいはたった一つの出来事が、人生の意味のほとんどを、あるいは全てを変えることがあります。伸び盛りの皆さんに無駄なことは一つもないと思います。

今後市来中の生徒が、「どんな時も最善を尽くす」ことを心掛けて、志高く勇気をもって精いっぱい努力していくことを期待しています。そして大きな笑顔を咲かせましょう。

毎月十日は「心の教育の日」

立神中学校(南) 吉坂 実

先日の「人権学習」では、LGBTについて考えましたね。皆さんから「人それぞれ生き方や考え方が違う。」や「差別はいけない。」という感想がありました。

私たちの立神中学校では、毎月十日を「心の教育の日」と設定し、全校集会や学級で講話を聴いたり、生徒同士で考える授業をしたりする

ことに取り組んでいます。

私たちが朝一番に相手に会う時にする動作として「あいさつ」があります。挨拶には「近づくとく」という意味があるそうです。相手に近づき心をおかすことが「あいさつ」というわけです。私は離島で夜光貝を磨いてキーホルダーを作製したことがあり、ひたすら何時間もかけて磨き上げると虹色の光沢が浮かび上がってくるのにワクワクした経験があります。

また、掃除は自分自身の心磨きにつながると思います。皆さんは掃除の時間に何を磨いていますか。(教室の床や廊下をきれいに磨く。机や黒板を丁寧に拭き取るなど。)

さらに、剣道では「残心」という教えがあります。それは、相手に打ち込み、旗が上がっても相手の反撃に備える構えのことです。日常生活で例えると、

①トイレのスリッパを次の人が履きやすいように整えておく。

②使ったものを片付ける。

③テストでの答え合わせや解答を見直す。などに当たるのではないでしょうか。

ある休日、全盲の方を目的地まで介添えしてくれた立生に「大変感謝しています」とお礼の連絡がありました。とても勇気のある心温まる行動ですね。

皆さんも少し意識した行動をすることで、自分の心を磨き、相手の気持ちに寄り添えることにつながるのではないのでしょうか。

話のひろば



教材屋さん

知っている

青戸小(南)

樋渡康浩

「先生、〇〇小学校は、このごろ教育力が落ちてきているよ。だって、あそここの先生たちを見れば分かるもの。」

さすが、多くの学校に出入りしている教材屋さん、その見立てに驚かされた。

教職経験が浅い頃、学校に出入りしている業者さんは、その学校のことを一番知っている。と、先輩が教えてくれたのを覚えている。

それから、随分と月日が流れた。校長になったある町に赴任した際、その町の教材屋さん挨拶に行った。

「あれっ、先生は〇〇小学校で教頭をしていた人だよ。」

「覚えておられましたか。」

「忘れないよ。確か、先生は、たった一人の子どもの教材の申込みを、車で一時間以上もかかる所から持って来てくれたもの。ありがたかつ

たよ。今度は、この町に転動して来られたのですね。頑張ってくださいね。」

と言われた。数年前のそんなやりとりを覚えておられたことに恐縮した。

極小規模校のため教材の申込みがわずか一つ。しかも、申込みの締め切りを過ぎてしまい担任も困っていた。

「私が預かって届けるからいいよ。」

と言って、日曜日に持って行ったのだった。

赴任早々、その教材屋さんに励まされたことが一つの支えになって、その町で三年間の校長職を務めることができた。たった一人の子どもでも大事に接していくことの大切さを、その教材屋さんが教えてくれたように思えた。

永年働いてきた小学校教員としての務めが終わりに近づいてきた。今は学校経営に携わっており、我が学校が業者さんにはどのように見えているのか気になるところでもある。しかし、そのような目はかりを気にするのではなく、日々の課題に一生懸命取り組んでいく教職生活でありたい。

災害から学ぶ教訓

緑丘中(市)

二 川 美 俊

近年、猛暑や豪雨、異常な寒波などが毎年のように報道され、私たち

も他人事で済ませられない事態に追い込まれている。つい先日の七月にも大雨により、静岡県熱海市伊豆山地区で

大きな被害が出た。友人から数年前に「新居を構えて、引っ越しました。」と書かれた年賀状をもらっていた。確か熱海の伊豆山と住所が書かれていたように思い、住所録で確認してみた。

やはり、熱海市伊豆山〇〇番地と書かれていた。大学卒業以来、年賀状のやり取りだけ続いている関係であったが、共に汗を流し、同じ時間を過ごした友のことが気になった。「被害に遭っていない方がいいが。何かできることはないか。」と思い悩んだ末、思い切って電話をしてみた。数回の呼出音の後、女性の声が聞こえた。

簡単に友人との関係を話すと、一度も会ったことのない友人の奥さんから、「伊豆山地区は広いので、被害が出たところとは離れており、我が家は無事であった。主人は朝から職場に出かけた。」とのこと。ホッと胸をなで下ろした。

被害の状況と共に原因についても色々取り沙汰されている。以前、授業のゲストティーチャーで来ていただいた大学の先生から「鹿児島も多くの活断層があるので、地震などには用心し、もし、遠方へ避難する場合も地形やその土地の特徴を分かって、避難行動に結びつけないといけない。」また、「宅地等で山を削り、その土砂を谷筋に運び、造成した所は注意が必要だ。」と言われていたのを思い出した。今回の熱海の事例はまさしく、そんな土地であったように報道等の情報から推察できる。

学校や子どもたちが活動している場所にそのような箇所はないだろうかと見回してみることが必要であろう。また、子どもたち自身が、自

分の安全は自分で守るという意識を持つことが何よりも大切である。最近では「災いは繰り返しやってくる。」と認識を新たにしておいた方がよさそうである。学校で防災・減災意識を醸成し、子どもたちを未来につないでいくことが私たち教職員の責務であると改めて考えさせられた。

専門高校生の底力

鹿児島女子高

福 永 純一郎

昨日(令和三年七月二日)東京オリンピック女子四百メートルリレーの日本代表に、

鹿児島女子高校出身で、現在南九州ファミリーマート所属の鶴田玲美選手が選ばれたというニュースが入った。女子短距離では鹿児島県勢初となる快挙に鹿児島女子生徒・職員は大いに喜んだ。鹿児島女子高校には建学の精神がある。初代校長神崎宗八先生が西郷隆盛の漢詩からとった「耐雪梅花麗」だ。鶴田さんは高校時代、大時代は無名の選手であった。まさに厳しい雪に耐えて、美しい梅の花を咲かせてくれたことになる。私が教頭として赴任した平成二十七年度は鶴田選手は高校三年生として在籍していたが、同学年にもう一人陸上競技部で活躍した選手がいた。倉岡奈々さんだ。三年生の高校総体では三千メートルで全国優勝した。さらに二人の先輩にリオデジャネイロオリンピックで日本人としては二十年ぶりに決勝進出を果たした、

上原美幸選手もいる。当時オリンピック報告会を学校で盛大に行った事を記憶している。このように鹿児島県の一つの学校からオリンピックに二大会連続で出場する鹿児島女子高校は、本当にすごい学校であると再認識するばかりである。そして、三名の選手は家庭科や商業科を学んだ専門高校の卒業生でもある。在学中は、食物調理技術検定や簿記実務検定などに挑戦し、一級にも合格している。世界で活躍している選手が専門高校と関わっていることに誇りを持つばかりである。

専門高校では、普通教科以外にそれぞれの専門教科も併せて学び進路を決定していく。また近年では多くの生徒が大学等へ進学している。鹿児島女子高校には家庭と商業の学科があるが進学率は例年七十五%程である。中学生の高校進学率がほぼ100%に近いように、専門高校就職という状況は過去のものとなってきているように思う。また、専門高校を卒業して小・中・高の教師になる事例もある。例えば県内商業高校の教員の六割超は商業高校出身者である。現在、鹿児島女子高校という裁縫科から始まった県内有数の伝統校に勤務し、卒業生の活躍を目の当たりにできることに感謝したい。そして、東京オリンピック陸上競技で、鶴田選手が、日本代表のアンカーとして県民の皆さんに元氣や勇氣を与える力強い走りを見せてくれたことを誇りに思う。

(本校卒業生には氏名等の掲載は許可済み)

読書案内



■稲盛和夫 著

「新装版」心を高める、経営を伸ばす
素晴らしい人生をおくるために

下水流小(北) 長友 充 男

史上最も困難な状況下で開催された東京オリンピック。日本は多くのメダルを獲得したが、中でも女子バスケットボールの銀メダルには正直驚いた。日本のバスケットがここまでレベルが高まり、本場アメリカと決勝を戦うとは予想もしていなかったからだ。

学校を経営する立場となった今、チームの勝敗や選手個々のバスケット技術より、ヘッドコーチのトム・ホーバスの戦略や選手への指示、アドバイスしている姿が印象深い。体格で大きく劣る日本人チームを如何にして導いているのか。そのリーダーぶりに興味があつた。

校長としての私は、理想とする職員集団を育

てるためには自分自身にリーダーシップが足りないことを自覚している。経営に関して不勉強であり、望ましいリーダーの在り方について悩むばかりで実践化しないからである。

そこで、郷土の先輩である稲盛氏が書かれた本書を手にとってみた。経営者としての考えや心構えを学ぼうと思ひ、自分に足りないリーダーとしての資質を補うためである。

心に残る言葉として「ものごとを成就させる源は、その人が持つ情熱である。」を一つ目にあげたい。このことは長く仕えたある教育長の教えでもある。また、書には「自らが燃えよ。」ともある。自ら燃え上がり、余ったエネルギーを他に与える人こそが集団に必要であると。経営者としての理念や思いを職員に語り、一緒に燃え上がり夢を実現させていくよう努力することが大事である。

そして、「集団、それはリーダーを映す鏡である。」という言葉に自らを振り返った。自校の職員に感じる幾多の課題は、自分自身の課題だということである。自らが変わること職員も変わり、自ずと課題解決へ向かうことができるであろう。

本書は、簡潔な表現でありながら氏の経営者としての熱い心が伝わる著書である。また人としての生き様につながる教えも多く含まれているように感じる。今の自己を見つめ直す貴重な機会となった。

PHP研究所 一〇〇〇円

佐藤一斎「重職心得箇条」を読む

末吉小(隅)濱崎 忠雄

いまでも後世に受け継がれている西郷の「南洲翁遺訓」に「平日やしなう処の胆力を長ずべし。」「事に当り、思慮の乏しきを憂うること勿れ。凡そ思慮は平生黙坐静思の際においてすべし。」とある。意識をすると、「予想にもしなかつた事にも、動揺せず平然と対処できるような、常日頃から胆力を伸ばしておく必要がある。そして、いざ事物が起きたときに、自分の思慮の足りなさを嘆くのではなく、普段から静思するときに考えておかなくてはならない。」となるだろう。胆力とは、事にあたって、恐れたり、尻込みしたりしない精神力、ものに動じない気力、度胸のことである。

校長職となつてからの私は、「平生黙坐静思の際」に思慮することを意識して、「南洲翁遺訓」や「佐藤一斎『重職心得箇条』を読む」「佐藤一斎一日一言」「月刊誌『致知』」など、これまで読んできたいくつかの書物を手の届く所に置き、都度、開くようになった。書物を読むだけでは、西郷のような大人物にはなれないのであるが、日常的に西郷やそのルーツとなる教えに触れ、少しでも考えていきたいと思つたからである。

その中から今回紹介したいのは、西郷の思想や考えに大きく影響を与えた佐藤一斎について述べられた「佐藤一斎『重職心得箇条』を読む」である。本書は佐藤一斎の「重職心得箇条」に説かれている不易のリーダー論を、分かりやすく一条ずつ原文を引きながら解説している安岡正篤の講義語録である。

私にとっては、安岡が解説をしていることにも意味がある。安岡正篤は、昭和歴代首相や多くの財界人にも師と仰がれた人物で、私は安岡の考えに感銘を受け、多くの書を読んできたからだ。本書解説にある安岡の「知識・見識・胆識」について述べた箇所は、西郷の教えにも通ずるものがあり思慮させられる。今後も読書を通して、先達や今を懸命に生きる方々の教えや考えに触れ、平生黙坐静思で胆力・胆識を鍛えていきたい。

致知出版社 八八〇円(税込)



スマホ脳

海星中(北)下中 論

私たちはいつからスマホを使い、毎日どれだけ使っているのだろうか。かつてはスマホ、携帯もない世界で十分であったが、今はスマホがないと生活しづらく、スマホを忘れると落ち着かない。そして、スマホにはいろいろなアプリがあり、日常生活には欠かせない。電話、音楽、動画、タイマー、メール、SNS、スケジュール管理等々。分からないことをスマホで検索すると、様々な情報が手に入る。一方でその情報には、よく似た情報が添付されている。それを見ると新たな情報が入ってくる。そのうち時間たちが、本来の調べたいこととは違うことを見ていることがある。このように、日常生活の中でスマホに占める割合が増えてきていることは確かだ。

この本では人間の脳と感情が少しずつ進化した、社会に適応してきたが、現代社会のインターネットやスマホの情報システムに人が適応できないことが書かれている。適応できていないことにより、うつや精神的変調が生まれ、現代人を脅かしている。そして、IT企業の人たちは自分の子どもにはタブレット

トを触らせなかったし、ビル・ゲイツは自分の子どもには十四歳になるまではスマホを持たせなかったという。それは、スマホが子どもに与える影響について慎重になっていたからである。また、子どもたちはスマホ依存の傾向が強くと、特に中学生は使用時間が最も長い世代であるという。一方で、スマホを開放したイギリスの主要都市にある学校の生徒は成績アップが見られることにより、明らかにスマホは学習妨害を起こしているという。最後に意外な解決策が紹介されていた。スポーツや運動をすること、リセットされると書かれている。

さて、便利なスマホではあるもののその使用については、考慮すべきであることが分かる。子どもたちも我々もスマホの利用については時間の制限や無駄な使用を避けて、スマホ依存にならない生活と運動を取り入れた生活を送るようにならなければならないと思った。

新潮社 九九〇円



■アンデシユ・ハンセン 著

スマホ脳

大口高校 橋口和寛

「世界一受けたい授業」というテレビ番組でこの本が取り上げられた。いま話題の本らしいので早速購入した。スマホ（スマートフォンのこと）という情報端末や、これが提供するサービスはヒトに深刻な影響を与えると主張する本だ。

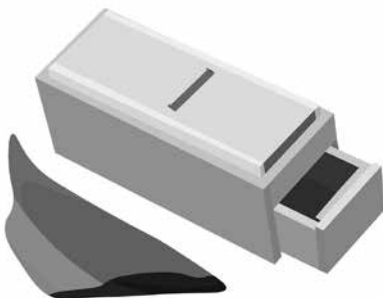
科学技術は生活を豊かにする一方、自然やヒトに深刻な被害も与えるという内容の本は、これまでにも出版され、話題となった。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』はその手の本の代表ではないだろうか。『沈黙の春』で取り上げられた食物連鎖による化学物質の生物濃縮は、高校の生物の教科書にも載っており、間違いなく事実と評価されている。他方、シア・コルボーンらの『奪われし未来』はどうだろう。あれほど世間を騒がせた内分泌攪乱化学物質（いわゆる環境ホルモン）を覚えていたのだろうか。

枕崎市の鯉節製造業数社が共同でフランスに鯉節の生産工場を建設し、四年ほど前から販売を開始している。なぜ枕崎から直接輸出できないのか、といえばEU諸国へは鯉節を輸出できないからである。輸出できない理由はいくつかあるが、その一つに鯉節を作る過程で発がん性化

学物質が付着するため、というものがある。EUは、エビデンスに基づき鯉節の輸入を禁止している。動物実験で証明されたこの発がん性化学物質の量をヒトの生活に置き換えると、一日当たり百キロの鯉節を毎日・数年間食べ続けるとガンが発生する計算になるらしい。

さて、『スマホ脳』である。アンデシユ・ハンセンはエビデンスに基づき、スマホはヒトの脳をハッキングし、甚大な影響を与えている可能性があると主張。スマホの影響を最小限に抑えるアドバイスをしている。デジタルネイティブ世代である高校生の教育への応用を考えた時、ヒトの脳はデジタル社会に適応していないと主張する『スマホ脳』は、レイチェル・カーソンと同じく間違いないのか、鯉節の輸入を禁止するEUと同じく過剰な反応なのか、ガラケーユーザーの私には評価が難しく、スマホユーザーの皆様の評価を拝聴したいところである。

新潮社 九九〇円



初任校が奄美であったため、島唄を聴く機会に恵まれた。代表的な曲について紹介したい。

【朝花節】稀れ稀れ汝きや 押で今汝きや 押むむば
にや 何時頃 押むかい (久しぶりにあなた方にお会いして、今お会いすれば、今度は何時頃にお会いできるでしょう。)

卒業式後の謝恩会で校区の唄者がこの歌を歌った。ゆったりと格調高く歌い、ハレの場の雰囲気を出してくれた。一方、加計呂麻島の宴席で聴いた朝花節はテンポが早く軽快な印象を受けた。その唄者は声に味を出すためにあえてのどを潰したようだ。いぶし銀のようなかすれ声はシマの風景を感じさせた。その後、歌遊びが始まり、島唄をかじっていた私も参加したが、すぐに戦線を離脱した。CDを聞いて覚えた歌詞だけでは通用しなかった。地元の人々は聞いたことのない

歌詞を次々と繰り返す。いかに多くの歌詞を覚えてあるか。そしてその場にふさわしい歌詞をひねり出すことができるか。歌半学(島唄を知つてれば学問の半分は理解したも同然という考え)と言われる理由を知った。

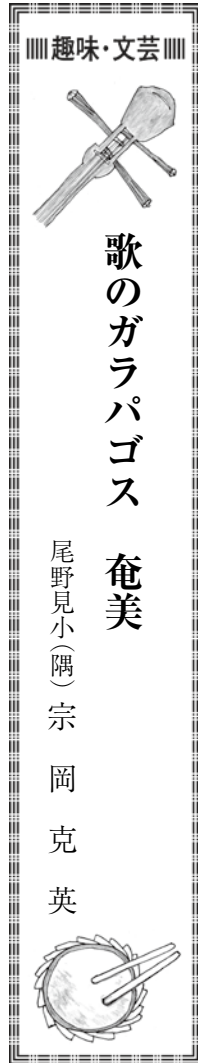
【くるだんど節】黒だんど 雨乞い願たど 黒だんど いきやるまい 島中の人きやのいきやるまい (空が黒ずんできたぞ。雨乞いして願つたら、空が黒ずんできたぞ。大喜びだ。島の人たちは大喜びだ。)

もとは雨乞いの歌であつたらしい。その後、世相を歌った歌詞が次々と作られ、この曲に乗せて歌われた。歌えば歌うほど味が出てくる

メロディである。幕末に奄美で白糖工場建設を指導した建築・機械技師ウォートルスと恋人ましゆの別れを歌った歌詞も残されている。

【塩道長浜節】塩道長浜に童泣きしやすや うれや誰がゆり 汗肌ぬけさまつゆり (塩道長浜に夜な夜な若者の泣き声が聞こえるが、それは誰のせいでしょうか。けさまつという女の馬にひきずられて若者が殺されたせいだ。)

哀調を帯びた三味線の前奏が悲劇を暗示する。そして最初の歌詞「しゆみちながはま」が物語の舞台(夜の砂浜)を設定する。続く歌詞は出来事しか語らないが、長く伸ばされた語



歌のガラパゴス 奄美

尾野見小(隅) 宗 岡 克 英

尾が浜で起きた悲劇について聴き手の想像力をかきたてる。現在、塩道長浜は当時の面影は失われた。しかし、歌を聴くことよつてこの悲劇を一本の映画のように体験することができる。

【行きゆんにや加那節】行きゆんにや加那 吾きやくと忘れて行き苦しや (私を残して行つてしまつたちゃが行き苦しや) (私を残して行つてしまつたですか。いいえ。出発しようとするのですが、あなたのことを思うと行き苦しい。)

惜別の歌である。小学生の時、金管バンドの顧問の先生が教えてくれた。三味線教室では一番最初に習う。本土から入つた数え歌が元歌らしいが、すっかり奄美の歌である。私は送別会

で転出する先生方へ歌うことにしている。

【豊年節】西ぬ口から白帆巻きや 巻や来ゆうり 蘇鉄ぬドガキガイやはんくぶせよー (西の口から白帆を巻くようにして、船がやってくる。蘇鉄のドガキガイなど、くぶしてしまえ。)

三味線の前奏に続き、少し遅れてチヂン(鼓)が入る。荷を満載にした船が水平線に現れ、島に近づいてくる様を見事に表現している。そして、歌詞は、物資を心待ちにしている人々の気持ちを分かりやすい例えで伝える。薩藩時代の薩摩と奄美の関わりを描いた歌である。チヂン(鼓)の入る曲は軽快で踊りだしたくなる。

【六調】踊り好きなら早よ出て踊れ あとははぐれて踊らぬ (踊りが好きなら早く出て踊りなさい。踊れなくなりませよ。)

宴の最後を盛り上げる踊り歌である。九州本土の六調子が伝わり奄美化された。三味線とチヂンが鳴り出すと血が騒ぐ。奄美の人々は誇りをもって踊る。上手な踊り手は自分の踊りを持ち、六調の裏打ちのリズムを絶妙に表現する。

耳をすまして島唄を聴けば、本土や沖縄からの影響を受けながらもそれを消化し、独自の島唄文化を育んだ奄美を垣間見ることが出来る。奄美は歌のガラパゴスでもある。七月に奄美大島と徳之島の森が世界自然遺産に登録された。往年の奄美の人々はこう歌うに違いない。

守りんしよる 生き物と歌ぬ宝島 奄美ぬ島々



「ひと、まち、ものづくり」 が輝く美山

美山小(日) 前 島 幸 夫

一 はじめに

本校区は日置市東市来町にあり、以前は苗代川と呼ばれ、薩摩焼発祥の地として知られている。黒物・白物と呼ばれる黒薩摩や白薩摩は四百余年の伝統があり、窯元も数多く、県下最大の産地となっている。

また、陶芸の里「美山」として四百余年の歴史がある。平成十年十月十九日に当時の日韓の首相・県知事・市長などの来賓をはじめ多くの参加者の下、薩摩焼四百年祭の行事として記念式典・共同登り窯への点火式・記念石塔除幕式等が盛大に開催された。

現在の本校区には、薩摩焼だけでなく、ガラス工房やギター工房などもあり、美山地区公民館基本理念として「ひと、まち、ものづくり輝く美山の里」を掲げて、住民の融和総意を結集し、校区の特徴を生かした住みよいまちづくりを目指している。

そこで、その取組の一部を紹介する。

二 まちが活気づく美山窯元祭り

コロナ禍になる前(令和元年度まで)は、行政・地域・窯元等が一体となって十一月に美山窯元祭りと呼称して各窯元等の陶芸品販売陶芸体験・各種青空市場の出店などを催していた。市内外から毎年約六万人の来場者があり、校区が一段と活気づく祭りである。

コロナ禍になっても、美山窯元祭りから美山クラフトウィークとして代替企画を催し、陶芸の里「美山」のよさを発信している。

三 妙円寺詣り「美山少年隊」

県PTA会長も務められた第十四代沈壽官先生が昭和三十八年に始められた美山少年隊が現在まで続けられている。

妙円寺詣りに参加している多くの人々の中で一番奉納隊として子どもたちに武者行列と祭文奉納をさせることによって、「小規模校の子どもたちが、将来、大勢の人々の中に入っても気後れせず自信をもって行動できる人間になってほしい。」という願いがこの行事には込められている。園児・全校児童・保護者・地域民が参加する五十八年も続く伝統行事である。

四 元外相東郷茂徳記念館

美山に花を咲かせた陶工たちの末裔で外交官として身を立て、太平洋戦争の回避のために日夜尽力し、また、戦後は早期終結へ向けて粉骨砕身して平和を唱えた外務大臣「東郷茂徳氏」の生涯を展示した施設である。貴重な写真や資料が多々あり、六年生の社会科見

学施設として活用されている。

五 まちの発展を目指した活動

ものづくりとしてのまちをさらに発展させるためや人口減少を抑えるために、地域貢献団体むつみ会や未来つなぎ隊、地域おこし協力隊などと連携し、移住者・定住者を積極的に迎へ入れる活動を行っている。移住・定住を促進し、人口増・児童数確保・地域活性化を目的として推進委員会を定期的に開催し、情報交換や具体策の協議を行っている。

また、高齢者が安心安全に住めるまちとなるよう福祉推進委員会を開催し、見守りや声かけ、移動販売車の誘致などいろいろな活動を推進している。

六 特色を生かした「美山ならではの」教育

美山小学校では、こうした特色を生かして毎月お茶碗給食を実施している。各窯元から寄贈していただいたマイ薩摩焼茶碗で、子どもたちは薩摩焼のよさを感じながら美味しく給食を頂いている。

また、日曜参観では、子どもたち自身が使っている薩摩焼茶碗の窯元さんから作り方の工夫や思いを聞いた後、親子ふれあい焼きものづくりで陶芸体験を行っている。「美山ならではの」の活動である。

七 おわりに

以上のように、美山の将来を見据え、伝統歴史・自然を大事にしながらまちおこし改革に地域民が一体となって取り組む「ひと、まち、ものづくり輝く美山の里」である。

総務部だより

総務部は、本校長協会の活動方針・計画の検討や、県PTA連合会等の各種連絡会、県教委への予算要望等の検討、役員会の運営などを行うとともに、地区校長会及び各専門部との連携を深め、校長協会の活動の方向性や懸案事項の検討などを行っている。昨年度同様、新型コロナウイルス感染症対策を進めながら、効果的・効率的な運営に努めている。以下、これまでの取組を紹介する。

一 県教育委員会への予算要望等の検討

令和四年度「学校予算に関する要望書」及び「人事並びに給与に関する要望書」について、七月三十日の役員会で協議し、承認された。その中から、学校予算に関する要望の「教職員の配置改善」について、追加等を行ったものを一部紹介する。

【小・中学校、義務教育学校】

○ 多様化する教育課題解決に向け、学校組織の機能化と働き方改革を推進するミドルリーダーとしての主幹教諭の配置、他県でも導入が進められ、後継者育成の視点からも重要

○ 小学校外国語専科教員をはじめとする、小学校高学年の教科担任制に向けた教育の配置及び拡充、新たな制度に対する人的配慮

【高等学校】

○ 多様な生徒へのケアかつ緊急時の迅速な対応のため、教員の加配の拡大、及び常駐のSCの配置や、家庭などの問題に訪問を通して、広く助言・支援を行うSSWの配置

二 県PTA連合会との連絡会

七月十七日(土)に県連合校長会と県PTA連合会との連絡会が開催され、新型コロナウイルス対策など、当面する課題について、質疑応答・意見交換が行われた。主な内容を紹介する。

【新型コロナウイルス感染症拡大防止対応他】

◆学校(校長)から

・ 五月に運動会を実施したが、三部制とし種目も二種目に限定した。PTA予算によりネット配信も行った。(小学校)

・ 一番の課題は不登校生が増えたことである。修学旅行が延期となり登校意欲が下がったことなどが要因であると考えられる。不登校の子どもにもタブレットを持ち帰らせ、実験的に実施している。(中学校)

・ 学習については、可能な限りオンラインを活用するなど工夫して行っている。(高校)

◆質疑応答(PTAが質問、校長が回答)

Q: 今後、学校での予防接種はどうなるのか。
A: 実施の方向にはいかないのではないか。文科大臣も同様の見解である。

Q: 学校としてPTAに協力してもらいたいことはないか。
A: 学校支援ボランティアにしても感染予防しながらやっていきたい。予防接種については、十分な配慮が必要なことである。

(PTAから)市P連の部会で、「接種がいいねにつながらないように」と懸念しており、今後、学校と連携をしていきたい。

Q: 昨年度、PTA活動が行えず、家庭訪問もできなかったが、今年度の対応は。
A: 家庭訪問に代えて、三者面談で実施した学校もある。

Q: GIGAスクール構想の問題点はあるか。
A: 朝、登校したら、保管庫から取り出し、机の中に入れて学習環境を整えるなど、端末を積極的に活用している。

三 地区校長会との連絡会(話題になったこと)

A: 朝、登校したら、保管庫から取り出し、机の中に入れて学習環境を整えるなど、端末を積極的に活用している。

○ 働き方改革の現状について

・ 県教委HPの「フォローアップ調査」を参照

○ 業務改善について(教委の調査の改善)

・ 県への要望の会で話題にしていく。
・ ICTの活用(欠席連絡・保護者アンケート等)が考えられる。

○ 意欲のある教職員の養成・採用について

○ 小学校高学年の教科担任制について

○ GIGAスクール構想で一人一台のタブレットを家庭に持ち帰っての活用はWiFi環境の違いにより影響が出ている。

○ 中学校における休日の部活動の段階的な地域移行については、継続的な予算措置や中体連との関係等との問題が懸念される。

○ 高等学校側からの部活動等の紹介・説明の案内が中学校の最終三者面談以降にある場合があり、できれば高等学校からの案内等は十一月末までにできないものか。

○ 公立の高等学校の七月の体験入学を私立と同様に五月に実施してほしい。

総務部が運営する役員会では、県への要望事項の他、校長研究大会や、校長協会に関連する次年度の重要案件である「日本教育会全国教育大会鹿児島大会」などについて話し合われた。課題解決に向けて、総務部として、関係者(機関)と連携を深め、連絡調整等を進めていきたい。今後とも御理解と御協力をお願いしたい。

*** こころの詩 ***

万葉集を読む

風に秋の訪れを感じたと詠んだ歌として、額田王の次の歌があまりにも有名だ。君待つと我が恋ひ居れば我が宿の

簾動かし秋の風吹く

この歌は、次の鏡王女の歌と一緒に、万葉集巻四に並べ置かれるとともに、巻八の秋の相聞の部の冒頭にも置かれている。風をだに恋ふるはともし風をだに

来むとし待たば何か嘆かむ

このように重ねて載せられている歌はこの二首だけである。ということは、この二つの歌は、秋と恋とを重ね合わせた象徴的な歌として、特別な意味を持たされていたわけである。こうした感性は、その後も引き継がれ、古今集の中の藤原敏行のあの有名な歌を生んだ。

秋来ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

これなどは、日本人の季節感を表現した典型的なものといえるのではないか。

一般財団法人校長会館だより

「公益事業について」

平成二十四年に財団法人から一般財団法人へと移行し、その際、内閣府より認可に当たった条件として公益事業の実施が義務づけられました。

これまで、公益事業として、「鹿児島県の教育（月刊）」「鹿児島県の教育（特集号）」「師の道」の教育関係者や公立図書館等への配布及び一般市民を対象とした教育講演会の開催を行ってきています。事業完了の見込みは令和九年三月三十一日となっています。

季節の言葉 「文月」

文月や六日も常の夜には似ず

芭蕉

旧暦七月の別称。文月は文披月（ふみひらきづき）の略で、七夕の行事に因んでいる。すでに秋の気配がある。
七夕月、女郎花月、秋初月などの呼び方もある。

編集

後記



東京オリンピック開幕に合わせて、NHKでは二〇一九年に放送された大河ドラマ「いだてん」の再放送がありました。大震災や戦争によって翻弄された東京オリンピックの実現までの内容が実にミカルに表現されています。ワクチン接種後の体調不良中ではありましたが、久しぶりに感動を覚えました。アジア初、二度目の夏季五輪は、新型コロナウイルスのパンデミックの年と重なり、史上初の延期、緊急事態宣言下での開催となりました。ただ、始まってみれば、兄妹姉妹で金の柔道やレスリング、復活した野球やソフトボールでの金など素晴らしい活躍でした。このような状況下で必死に戦った選手たちに敬意を払うばかりです。今回のテーマは、「多様性と調和」でした。立命館アジア太平洋大学学長で、知の巨人として知られる出口治明氏は、日本でユニコーン企業が生まれなかったのは、女性進出の遅れ、ダイバーシティがないこと、勉強不足と言っています。今後、この多様性の視点をどれだけ持てるかがキーワードになってくると思われまふ。そして、SDGs十七の目標それぞれの実現が近づき、つながっていく効果もまた多様性であると言われています。新学習指導要領が開始され、今後益々重視されていくテーマになってきそうです。

この四月に初めて広報部会常任部員を拝命し、本会誌がこれようにして編集されていくことを知り、これまで担当された校長先生方の御苦労に感謝するばかりです。今回も御多用な中に玉稿をお寄せいただいた執筆者の皆様にご心から厚くお礼申し上げます。

（鹿児島女子高校 福永 純一郎）